

# 『純粹理性批判』における感性と統覚の両義的關係 ：超越論的觀念論における知覚判断の可能性を巡っ て

重松, 順二  
九州大学文学部 : 非常勤講師

<https://doi.org/10.15017/1446183>

---

出版情報 : 哲学論文集. 47, pp.49-65, 2011-10-01. 九州大学哲学会  
バージョン :  
権利関係 :

## 『純粹理性批判』における感性と統覚の両義的關係

——超越論的觀念論における知覚判断の可能性を巡って——

重松 順 一

### はじめに

『純粹理性批判』における「経験」とは「経験的認識、すなわち知覚を通して客観を規定する認識であり」(B218)、「客観を規定する認識」とは数学的自然科学という学的認識を典型とする客観的認識のことである。しかしながら、私たちの経験は客観的認識だけから成るのではない。色や温かさや味などの主観の状態に依存した現象の意識、すなわち知覚もまた日常における私たちの経験を成しているのである。そればかりか、客観的認識は日常的な経験の中で構成されていくものではないだろうか。上で引用した「経験」の定義における「知覚を通して」という文言は、主観的な知覚経験が客観的な認識の根底にあることを示唆しているのだとも考えられる。

客観的認識の根底に主観的な知覚経験を認めるこの見解に対して、従来一般的には、客観的認識のみならず、知覚もまた、純粹悟性概念によってアプリオリに規定されなければならないのだと解釈されてきた。なぜなら、もし知覚と純粹悟性概念

とのアプリオリな関係が保証されないならば、知覚と純粹悟性概念との間には乗り越えがたい隔たりが存在することになり、その結果、純粹悟性概念を経験の可能性の条件だと見なすことはできなくなるからである。<sup>1)</sup>

しかしながらそうだとすれば、感性和悟性によって規定された知覚は、もはや主観的な現象ではなく、客観的認識のための単なる一契機になってしまつのではないだろうか。換言すれば、純粹悟性概念によって客観的認識が構成されると同時に、主観に依存して現れる知覚経験は客観的認識に回収されてしまい、知覚経験の主観的側面は看過されてしまつのでなかろうか。

ところで、主観的な現象はたとえ主観の状態に依存しているとしても、まったく偶然的で無規則的に生起するのではない。たとえば、燃え盛る炎が時として熱く時として冷たくなりはしないし、雪が時として冷たく時として熱くなることはない。主観的な現象のこうした規則性はそのすべてが純粹悟性概念に由来しないのではないだろうか。なぜなら、もしあらゆる主観的な現象が純粹悟性概念にアプリオリに規定されているのだとすれば、私たちのあらゆる経験が客観的な認識になつてしまつからである。

詳細については本稿の本論で論じるが、カントが、感性が悟性に先立つのだとしばしば述べ、あるいは「対象が必然的に悟性の機能に関係することなしに、したがって悟性が対象のアプリオリな条件を含むことなく、対象は確かに私たちに現象することができる」(A89, B122)と語るとき、カントは『純粹理性批判』で主題的に論述する客観的認識の根底に、カテゴリーとは無関係に成り立つ主観的な知覚経験が存していることを暗示しているのではないであろうか。

そこで本稿では『純粹理性批判』のなかで論述されている認識諸能力の関係性を解き明かしていくことを通して、悟性よりもさらに根底において活動しつつ、主観的な知覚経験を可能にする意識を見定めてみる。

さて、『純粹理性批判』においては感性和悟性という認識の二源泉が繰り返し強調される。<sup>2)</sup> しかしながら『純粹理性批判』第一版の「超越論的分析論」(以下「分析論」と表記)の第二章第一節では、感官と構想力と統覚という三つの認識源泉が

提示される。そればかりか、それらは「それ自身、心のいかなる他の能力からも導き出すことのできない」(A94)「三つの根源的源泉」(A94)だと呼ばれている。

そのため本論文第一節では、「分析論」第一版第二章の第二節「経験の可能性に対するアприオリな根拠について」と第三節「対象一般に対する悟性の関係と対象をアприオリに認識する可能性について」(以下、第二節と第三節を併せて第一版「演繹論」と表記)の叙述に即しながら、三つの認識源泉がどのように活動するのかを考察する。

### 一、第一版「演繹論」への三つの認識源泉の導入とその働きについて

感官と構想力と統覚という三つの認識源泉は、純粋悟性概念の超越論的演繹のなかにもどのようにして導入されるのであるか。これを確認することから議論を始めよう。

第一版「演繹論」全体の主題は、周知の通り、純粋悟性概念即ちカテゴリーの客観的妥当性の論証である。これに関してカントは、感性形式である空間と時間の客観的妥当性の論証では遭遇しなかった困難に直面する。

「いかにして思惟の主観的条件が客観的妥当性を持つべきなのか。換言すれば、いかにして思惟の主観的条件が対象のあらゆる認識の可能性の条件を与えるべきなのか。ただし悟性の機能がなくても、確かに現象は直観において与えられることが可能だからである。」(A89f., B122)

カテゴリーの客観的妥当性に関する困難とはすなわち、経験的なものを一切混入させずに「悟性の論理的機能」(A70, B95)だけを手引きとしながら「体系的」(A80, B106)導き出される純粋な思惟形式であるカテゴリーが、それとはまっ

たく無関係に与えられることができる直観の対象すなわち現象に、いかにしてア priori に関係すべきなのかという問題である。

この困難を前にして、感性と悟性という二つの認識源泉の代わりに、感官と構想力と統覚という三つの認識源泉がカテゴリーの超越論的演繹に導入されているのである。

以上から、三つの認識源泉の導入が確認されたが、この導入の意味を推察すると次のようなことではないだろうか。すなわち、カテゴリーの客観的妥当性に関する困難は、感性と悟性という認識の二源泉だけでは乗り越えがたいが、もし認識源泉の三元性を考慮するならば、困難が解決できるようになるということではないだろうか。

しかしそうだとすれば、感性と悟性という認識源泉の二元性は、認識源泉の三元性に修正されることになってしまっているだろうか。そこで次に、第一版「演繹論」において三つの認識源泉がどのような働きをする能力として描き出されているかを見てみよう。

第一版「演繹論」の前半部（第二節）によれば、認識を可能ならしめるのは「三重の綜合」（A97）すなわち(1)直観における覚知の綜合・(2)構想における再生の綜合・(3)概念における再認の綜合であり、これらの基礎に、感官と構想力と統覚という三つの認識源泉が存する。それでは、第一に「三重の綜合」によって認識はいかなる仕方でも可能になるのか、第二に「三重の綜合」のなかで三つの認識源泉はどのような役割を果たすのか。まずは「直観における覚知の綜合」から検討してみよう。

直観において多様がまず与えられる。しかしながら直観の多様は、時間継起に従って区別されつつ受け取られなければならない。カオス状態に止まる。したがって直観の多様は、時間継起に従い「まず多様の通覧 (Durchlaufen)」、そして次にその多様の総括 (Zusammennehmung) が必要である。」(A99) への働きが「直観における覚知の綜合」である。すなわち、直観の多様が多様として与えられるときにすでに「覚知の綜合」が働いていなければならないということである。

しかしながら、直観の多様を「通覽」し「総括」する際、「もし先行する表象（線の最初の部分、あるいは次々に表象される単位）を私がいつも忘れて次の表象に進んでいきながら先行する表象を再生することがないならば」（A102）一つの全体表象は生じないことになる。したがって「覚知の綜合」には、次々と過ぎ去ってしまう印象を保持し「対象の現前無し」（A100）再びその印象を再現していかなければならないのである。このように「覚知の綜合」と不可分に結びついていなければならぬ綜合が、「構想における再生の綜合」である。

ところがこれらの綜合だけではまだ、一つの全体表象が成立することはできない。それが成立するためには「覚知の綜合」と「再生の綜合」のほかになお「再認の綜合」が必要なのである。なぜなら、直観の多様を多様として受け取ったものを再生し保持したとしても、再生された表象が過ぎ去った表象を「同一」（A103）であることが「意識」によって再認されないならば「あらゆる再生は無益（A103）だからである。換言すれば「意識」が、再生の能力としての構想力を介して表象の同一性を再認しつつ表象を再生していかないならば、「私たちが考えているものは、いまの状態における新たな表象であるだろう」（A103）からである。したがって、表象の多様から一つの全体表象が構成されるためには、表象の同一性の「意識」が必要不可欠なのである。そしてこの「意識」こそが「統覚（Apperzeption）」と名づけられる。

以上の考察から、先に提出した二つの問題、つまり「三重の綜合」によっていかにして認識が可能になるのかということと、そのなかで三つの認識源泉はどのような役割を果たすのかということが判然となる。すなわち、前者に関しては、綜合能力としての構想力が、表象の統一能力としての統覚に従いつつ「覚知の綜合」・「再生の綜合」・「再認の綜合」によって、直観の多様から経験的認識を構成する。そして後者に関しては、感官は「多様の概観（Synopsis）」（A94）の能力であり、構想力は「多様の綜合」（A94）の能力であり、統覚は「綜合の統一」（A94）の能力なのである。

さて、感性と悟性という認識源泉の三元性に代えて、認識源泉の三元性が超越論的演繹に導入された理由は、悟性とは無関係に与えられる現象と、悟性にのみ由来するカテゴリーとの断絶を解消するためであった。それでは、三つの認識源泉に

もとづく「三重の綜合」によって、断絶している現象とカテゴリーのアプリオリな関係に橋を架けることはできるのである。そのために次節では「三重の綜合」を体系的な連関のもとで顧みてみよう。

## 二、カテゴリーの超越論的演繹における認識源泉の二元性と三元性の関係

『純粹理性批判』の「緒言」で最初に確認されるように「時間的に見れば、私たちの内に生じるいかなる認識も経験に先行することなく、あらゆる認識は経験をもってはじまる。」(B)したがって「三重の綜合」もまた「時間的に見れば」「経験でもってはじまる」「覚知の綜合」が端緒となり「再認の綜合」で終わるといふ順序でなければならぬ。しかしながら「三重の綜合」を超越論的認識からみれば、むしろ逆に「覚知の綜合」において直観の多様として与えられる場面においてすでに、超越論的構想力を介して統一の超越論的条件としての超越論的統覚がアプリオリに働くべきである。したがって「三重の綜合」によれば、超越論的統覚からまったく独立して与えられる直観の多様などというものはそもそも存在しないことになる。

「三重の綜合」によって、現象とカテゴリーの断絶を解消するための準備は整えられた。すなわち超越論的統覚が超越論的構想力を媒介として、直観の多様が与えられるときにすでに感官にアプリオリに関係しているということが「三重の綜合」の体系的連関において突き止められた。そこで次の問題は、カテゴリーの源泉としての悟性と超越論的統覚の関係であるが、これは、感性と悟性という二つの認識源泉と、感官と構想力と統覚という三つの認識源泉の関係を露わにすることで解き明かされるはずである。

さて、三つの認識源泉のうちカテゴリーの超越論的演繹においてさしあたって注目されるべきなのは、構想力と統覚であり、それらと悟性との関係である。なぜなら感官は感性と同じであり、それ故その本性は「感性論」ですでに洞察されてい

るからである。

「この「感官と構想力と統覚の」超越論的使用のうち、私たちは感官に関しては上の第一部「感性論」においてすでに述べた。しかしながらいま私たちは他の二つ「構想力と統覚」をその本性に関して洞察することに努めたい。」(A95)

それでは、悟性と構想力と統覚はどのように関係するのであるつか。これに関して、三つの認識源泉は「悟性の要素」(A98)だと語られるところがある。そしてその少し前では、三つの認識源泉は「悟性さえも可能にし、またこの悟性を通して、悟性の経験的産出としてのすべての経験を可能にする」(A97f.)ものだと言われている。三つの認識源泉のうち、感官が感性に対応するものであるなら「悟性さえも可能にする」「悟性の要素」とは構想力と統覚だということになる。したがって、第一版「演繹論」において悟性をはじめ主題に上る場面において、悟性と構想力と統覚は次のように関係づけられている。

「構想力の綜合に關係する統覚の統一は悟性であり、この同じ統一が、構想力の超越論的綜合に關しては、純粹悟性である。」(A119)

すなわち、認識源泉は感性と悟性の二つであり、このうち悟性はさらに統覚と構想力という「要素」に分解されるのである。

これに対して、第一版「演繹論」には、構想力と統覚の両者が「悟性の要素」ではなく、統覚は悟性と同じものと見なされるが、構想力は、感性とも悟性とも違う独自の第三の能力だと解釈できる箇所がある。たとえば次の言明はその決定的な



論拠であるように思える。

「したがって私たちは、あらゆる認識の根底にアプリアリに存する人間の心の根本能力としての純粹構想力を持っている。これを媒介として私たちは、一方の側なる直観の多様を、他方の側なる純粹統覚の必然的統一の条件と結合する。これらの両極端、すなわち感性和悟性は、構想力のこの超越論的機能を媒介として必然的に関連せざるをえない。」  
(A124)

ところで、悟性即ち超越論的統覚だとすれば、超越論的構想力も感性和も違う第三の「根本力」だと見なさざるをえないのではないだろうか。超越論的構想力のこの独自の位置づけは次の主張のなかで、構想力の綜合は「多様なものをそれが直観において現象するがままに結合する」「つねに感性的なもの」だとされていることから窺い知れる。

「この統覚こそがいまや、純粹構想力を知性化するために、純粹構想力に付け加わられねばならないものである。けだしそれ自身構想力の綜合は、アプリアリに行われるものであるとはいえ、それにもかかわらずつねに感性的なものである。なぜならこの綜合は、多様なものをそれが直観において現象するがままに結合するからである。」(A124)

以上のことから、第一版「演繹論」において、悟性と構想力と統覚の関係は両義的なものであることが判明した。すなわち、或る箇所では、構想力と統覚から成る悟性と、感性和が認識源泉とされ、別のある箇所では、悟性即ち超越論的統覚と感性和が両極に固定され、その上でそれらの中間に媒介者として構想力が存するとされる<sup>5)</sup>。

ところで、この曖昧さは認識源泉の二元性と三元性の関係にも影響を及ぼすのである。前者の場合は、認識の三源泉は

「悟性の要素」を分解したことになり、したがって認識の三元性は、カテゴリーの超越論的演繹のために認識の二元性、そのなかでも特に悟性をより詳しく分析したことになる。これに対して後者の場合は、構想力こそが「悟性さえをも可能にする」悟性以上の認識源泉だということになり、それ故認識の三源泉の、そのなかでも特に構想力が、認識の二源泉の中でも特に悟性のさらなる根拠を指示していることになるのである。

それでは、悟性と構想力と統覚の關係の両義性は何を意味するのであろうか。そこで次節では、三者の両義的な關係をさらに立ち入って考察してみよう。

### 三、悟性と構想力と統覚の両義的關係と根本的能力としての構想力

悟性と構想力と統覚の關係が両義的關係であれ、カテゴリーの超越論的演繹の遂行にとってはその両義性は致命的な欠陥にはならないはずである。なぜなら、構想力と關係する統覚が悟性であれ、或いは悟性即ち超越論的統覚であれ、いずれにせよ「三重の綜合」によって、悟性或いはそれに由来するカテゴリーが経験の可能性の条件であることが論証されつるからである。

しかしながら、構想力と關係する統覚を悟性と見なす場合と、悟性即ち統覚とし、構想力をそれとは区別されるべき第三の根本能力と見なす場合とは、感性的対象としての現象の意味がまったく違ってくる。すなわち前者の場合、現象は、それが与えられるときにすでにカテゴリーに従って思惟されている「現象体 (Phaenomena)」(A249)であるのに対し、後者の場合、現象は悟性とは關係なしに「未規定的対象」(A20, B34)として感性に与えられるはずのものである。したがって、悟性と構想力と統覚の關係は、カテゴリーの超越論的演繹にとって無關係であるところか、その關係をどのように考えるかに応じて、カテゴリーの超越論的演繹における困難な状況の意味が変わってくる極めて重要な事柄だといえるであろう。す

なわち、構想力が悟性に属する能力だとすれば、悟性とは関係なしに直接与えられる現象とカテゴリーとのアプリアリな関係という「演繹論」独自の難問は、現象の所与の場面におけるカテゴリーの不可欠性の論証を通して訂正され厳密に規定されるべき問題だということになり、構想力が悟性から独立した感性的能力だとすれば、カテゴリーの超越論的演繹は困難な状況に直面していることになる。

それでは、カント自身、二者の両義的關係をどのように考えているのであろうか。カントは「多様なものをそれが直観において現象するがままに結合する」「それ自体において」(A124)「つねに感性的な」「根本能力」として構想力を剔出した後で、感性と悟性という両極に位置する能力を媒介する能力としての構想力を問題にすることでカテゴリーの超越論的演繹を成し遂げようとする。

「これ「根本能力としての構想力」を媒介として私たちは、一方の側なる直観の多様を、他方の側なる純粹統覚の必然的統一の条件と結合する。これらの両極端、すなわち感性と悟性は、構想力のこの超越論的機能を媒介として必然的に関連せざるをえない。」(A124)

ここで構想力の階層を成す二つの機能が際立ってくる。つまり、構想力は、第一段階において、悟性から独立して「それ自体において」「つねに感性的な」「根本能力」として機能することによって、現象を「未規定の対象」へと結合し、第二段階において、「媒介 (Vermittlung)」する能力として「他方の側なる純粹統覚の必然的統一」に従いつつ「再認の総合」・「再生の総合」・「覚知の総合」によって「現象体」を成り立たしめる。これらの総合のうち「再認の総合」に、純粹悟性由来するカテゴリーが含まれている。<sup>7)</sup>したがって経験的直観の多様が多様として覚知されるときにはすでにカテゴリーが前提されていることになる。<sup>8)</sup>「ついでカテゴリーの超越論的演繹は完遂するのである。」

以上のことから、カテゴリーの超越論的演繹における悟性と構想力と統覚の兩義的關係を、カントがどのように考えていたのかが見て取れる。すなわち、三者の關係の曖昧さは、どちらの規定がより事柄に即しているのかという問題として受け取ってはならないのである。あたかも曖昧に思えた三者の關係の規定の仕方は、一方が、構想力を悟性即ち統覚から切り離すことによって、悟性に先立つ構想力の超越論的機能と現象との原初的かつ未規定的な關係を描き出すことを主な目的にしており、他方が、統覚と構想力を「悟性の要素」とすることに よつて、悟性或いはそれに由来するカテゴリーが經驗的認識の可能性の必然的条件であること(8)の論証、すなわちカテゴリーの「客觀的演繹」(AXVII)を主な目的にしている。要するに、三者の關係に関する規定の違いはこつした目的の違いに依じたものである。したがつて、カテゴリーの超越論的演繹において直面する困難は、訂正されるべきものではなく、そのままの形で維持されつづ解決されるべき問題なのである。

ところで、構想力が独自に開く現象の規則性と、悟性即ち超越論的統覚が可能にする「現象体」の規則性即ちカテゴリーとはどのように關連するのであるうか。そこで次節では、この問題を解き明かす手がかりを得るために、構想力と統覚との關係について第一版「演繹論」をさらに立ち入つて論究してみよう。

#### 四、「根本能力」としての構想力と根源的統覚

A122においてカントは、あらゆる知覚が屬する「根源的統覚」(ursprüngliche Apperzeption)を提示している。

「知覚が連想できるものではない場合、私の心における多くの經驗的認識がそこに見出されるが、しかしながらそれが離ればなれて、一つの自己意識に屬することなしに見出される知覚の群れが、またおそらく感性全体が可能だということになるだろうが、けれどもこのようなことは不可能である。ただし私があらゆる知覚を(根源的統覚といふ)一つの

意識に数え入れることによってのみ、私はあらゆる知覚に際して「私は知覚を意識する」ということができるからである。」(A122)

すなわち、多様な現象は経験的意識と結びつくことによって知覚として意識されるのであるが、そのためにはあらゆる経験的意識がそこに属しうる一つの「根源的統覚」が個々の知覚すなわち「多くの経験的意識」に先立って存していなければ、私の知覚とは言えなくなってしまうのである。

しかしながら、この引用に続けてすぐにカントは、現象そのものを支配する「客観的基礎」(A122)を「現象の親和性(Affinität)」(A122)と名づけ「構想力の超越論的機能を媒介としてのみ、現象の親和性は可能になる」(A123)と議論を展開する。それでは、あらゆる知覚がそこに属する「根源的統覚」と、現象そのものを支配する「現象の親和性」を開く超越論的構想力とはどのように関係するであろうか。

これらの関係を解き明かす手がかりは次の引用の中にある。

「したがって(根源的統覚)という一つの意識においてあらゆる(経験的)意識が客観的統一をなしていることは、「経験的意識に」加えてあらゆる可能的知覚の必然的条件であり、そして(und)すべてのあらゆる現象の親和性は(近くても遠くても)アプリオリに規則にもとづく構想力における総合の必然的な帰結である。」(A123)

知覚とは経験的意識に結びついた現象であり、経験的に意識されない現象は無に等しい。つまり「そして(und)」で結ばれている二つの言明、すなわちあらゆる知覚が根源的統覚において「客観的統一をなしていること」と「あらゆる現象が構想力によって「親和性」を与えられていることは、同一の事態を主観的な側面(意識の側面)と客観的な側面(現象の側面)

から述べていることになるのではないだろうか。そしてその同一の事態とは、根源的統覚と超越論的構想力とによって、現象の未規定的な「客観的統一」と「現象の親和性」が可能になるといことであるように解される。別言すれば、現象の未規定的な綜合統一は、根源的統覚に従う「構想力の超越論的機能を媒介としてのみ」(A123)可能になると解釈できるのである。

こうした解釈に対しては次のような疑問が提起されるであろう。すなわち当の統覚は、構想力と関係して表象の多様を綜合統一し「経験的認識のあらゆる客観的妥当性を可能にする」(A125)能力であり、これは悟性と一致するものではないかという疑問である。

しかしながら筆者は、悟性として経験的認識を成り立たしめる統覚と、上に述べた根源的統覚とは別の働きだと解したい。<sup>5)</sup>たとえば「表象としてのあらゆる経験的直観」(A124)の「相関者」(A123)である「純粹統覚 reine Apperzeption」(A124)恒常不変な自我」(A123)は、それがアプリアオリに行われる構想力の綜合に付け加わって綜合機能を「知性化 (intellektuell)」(A124)しなければならぬことが「今や (nun)」(A124)問題になるときにはじめて登場する。けれども根源的統覚はそれに先立つ議論のなかであらゆる知覚の可能性の条件として提示されているのである。これは、根源的統覚が純粹統覚よりもさらに原初的な場面で直観の多様と関係する統覚として考えられているからではないであろうか。

ところで、直観の多様を綜合統一する根源的統覚と、経験的直観の可能性の条件としての純粹統覚或いは超越論的統覚との区別を踏まえつつ、次の言明を読み解くとき、根源的統覚が悟性として働く以前に、感性に關係しているものであることが垣間見えてくる。

カテゴリーが「現象に対して客観一般を思惟する根本概念であり、したがってアプリアオリに客観的妥当性を有する」(A111) ことの論証が超越論的演繹の主題であることを確認した後、カントは次のように語る。

「このカテゴリーの可能性、否そのみならず必然性はしかし、感性全体が、またそれと共にあらゆる可能的現象が根源的統覚に対して持つ関係にもとづく。」(A111)

以上から明らかになったことは、悟性に先立つ直観の多様の未規定的な綜合統一には根源的統覚が関係していることである。すなわち、統覚は、第一に、根源的統覚として直観の多様を未規定的に綜合統一し、その上で第二に、悟性即ち超越論的統覚としてカテゴリーに従う構想力によって「未規定的对象」としての現象を認識の客観ないし「現象体」へと綜合統一するのである。したがって、現象そのものが持つ規則性としての「現象の親和性」と、「現象体」が持つ規則性としての力テゴリーは、両者とも、統覚によって可能になる規則性に他ならない。それ故それらの関係は連続的なものである。

## おわりに

『純粹理性批判』就中第一版「演繹論」のなかで論述されている認識諸能力の関係性を解き明かしていくことを通じてこれまでに見定められたことは、悟性に先立つて、感性と原初的に関係しつつ、主観的な知覚経験を可能にする根源的統覚であり、それに従う「根本能力」としての構想力である。これらは「悟性さえも可能にし、またこの悟性を通して、悟性の経験的産出としてのすべての経験を可能にする。」(A97f.)したがって、悟性即ち構想力に關係する超越論的統覚に由来する「カテゴリーの可能性、否そのみならず必然性」(A111)もまた根源的統覚と「根本能力」としての構想力にもとづくのである。

ところで、第一版「演繹論」では「人間の魂の根本能力」と捉えられていた構想力が、第二版「演繹論」ではカテゴリーに從屬する能力の面だけが強調され、「つねに感性的なもの」ではなく、むしろ悟性に屬するものと見なされるようになった。

例えば、第二版「演繹論」の冒頭では、悟性による「結合 (Verbindung)」(B129) は一般に「綜合 (Synthesis)」(B130) と名づけられており、また B151-152 の箇所では構想力は悟性に属することが明確に語られている。

そこで次に問うべきことは、これまでの成果を踏まえながら、第二版「演繹論」においても、根源的統覚と感性との原初的かつ未規定的な關係が、カテゴリーの超越論的演繹にとって重要な結果を導き出すということを突き止めることであり、加えて「現象の親和性」とカテゴリーとの連続的な關係をさらに立ち入って論究することである。

しかしながら、本稿の目的は、カテゴリー及びそれが由来する悟性に、先立つ 統覚と感性との原初的な可能性を、第一版「演繹論」において剔抉することであった。今やその目的は果たされたように思つた。したがって、第二版「演繹論」へと立ち入ってさらに考究を進めることは稿を改めて着手したい。

## 註

(1) この問題は、従来一般的には、カントの経験理論における知覚判断の可能性の問題として議論されている。『純粹理性批判』の定義によれば「経験」とは、カテゴリーに従つて構成される限りでの客觀的認識だけを意味するはずであるが、しかしながら「フロレトメナ」においてカントは「いかなる純粹悟性概念も必要としない」(Prol., S297)、「主觀的に妥当するのみ」(Prol., S297) の認識 すなわち「知覚判断 (Wahrnehmungsurteil)」(Prol., S298) が客觀的認識に先行していなければならないと語るのである。

従来、これに関しては対立する二つの解釈が存在する。すなわち、一方で、カテゴリーに従つたことのない知覚判断は、カントの経験理論にとって何ら積極的な意味を持っていないという解釈(ケンプ・スミスやカッシャーの見解)があり、他方で、知覚判断には積極的な意義が認められるという解釈、つまり、たとえ主觀的であったとしても、知覚判断は何らかの仕方でもカテゴリーに従つて構成される普遍妥当的認識なのだという解釈(ブラウスやベックやフロイダイガーの見解)がある。



しつつは従来の解釈に対して、カントリーの適用の有無によって知覚判断の判断としての正当性を評価するのではなく、知覚判断に関するカント自身の主張を尊重しつつ、知覚判断の積極的な意味を探らうというが筆者の狙いである。

Vgl. Smith, N. K., *A Commentary to Kant's Critique of Pure Reason*. 2nd ed., London, 1923, reprinted, 1979, p.288. Cassirer, E., *Substanzbegriff und Funktionsbegriff*, Berlin, 1923, S.325. Prauss, G., *Erscheinung bei Kant. Ein Problem der "Kritik der reinen Vernunft"*, Berlin, 1971. Beck, L. W., *Did the Sage of Königsberg Have No Dreams?*, in : *Essays on Kant and Hume*, New Haven/London/Yale U. P., 1978. Fraundiger, J., *Zum Problem der Wahrnehmungsurteile in Kants theoretischer Philosophie*, in : *Kant-Studien* 82, 1991, S. 416-435.

(2) Vgl. A15, B29, A50, B74, A51, B75, A294, B350.

(3) 超越論的認識とは、経験から独立して「私たちの認識能力が自分自身から産出するもの」(B1) だけから成るアプリアオリな認識の可能性を探求する試みである。

(4) 以下、本論文で指示される引用文中の「」内はすべて筆者による加筆とする。

(5) 岩崎武雄も悟性と超越論的統覚の関係についてのカントの考えの曖昧さに苦慮している。例えば、岩崎武雄「カント「純粋理性批判」の研究」(『岩崎武雄著作集』第七巻、新地書房、一九八二年)の一九五—一九八頁を参照。

(6) ファイヒンガーやコーイングは「分析論」の第十三節で見られる現象の規定、すなわち現象は、悟性とは無関係に感性によって与えられることと、カントリーの超越論的演繹の論証における現象の規定、すなわち現象は、感性によって与えられるときにすでにカントリーが前提されねばならないこととの間には矛盾があることを指摘する。これに対してカッシーラーやゲライエフにすれば、これらの規定の間にあるのは矛盾ではなく、後に訂正され、厳密に規定されるべきものである。また、解決しがたい困難に直面したと思ったが、実はそこには何の問題もなかったとごまかすことによって問題が解決されているとカントリーのもいふ難解である。Vgl. H. Vaihinger, *Kommentar zu Kants Kritik der reinen Vernunft*, 2. Aufl. Stuttgart/Berlin/Leipzig, 1922, Bd. 2, S.5. A. C. Ewing, *A Short Commentary on Kant's Critique of Pure Reason*, London, 1938, S. 107. E. Cassirer, *Das Erkenntnisproblem in der Philosophie und Wissenschaft der neueren Zeit*, 3Bde. Berlin, 1922-23, Bd. 2, S. 700. F. Grayeff, *Deutung und Darstellung der theoretischen Philosophie Kants*, Hamburg, 1951, S. 117. R. Zocher, *Kants transzendenter Deduktion der*

Kategorien, in: *Zeitschrift für philosophische Forschung*, Bd. 8, 1954, S. 168.

- (7) 本文では言及しなかったが「概念における再認の綜合」の中の「概念」は「カテゴリー」を指すのである。
- (8) 第一版「演繹論」は二つの側面を持つ。ひとつは「純粹悟性を持つマブリアオの概念「カテゴリー」の客観的妥当性」(AXVI)の論証を目指す「客観的演繹」(AXV)であり、もうひとつは「純粹悟性そのものを、その可能性として純粹悟性自身がそれにもとづく認識力とに關して、すなわち純粹悟性を主観的關連において考察する」(AXVI)「主観的演繹」(AXVII)である。
- (9) 多くのカント解釈者は統覚即ち悟性を見なすが、三木清は、ハイテガーの構想力の解釈を繼承しつつ、さらにそこから一歩進めて、構想力だけではなく統覚にも悟性とは別の根本的な働きを認める。例えば、悟性と統覚の關係を三木は次のように語る。「實際、カントは一方、対象的意識の問題を論ずる純粹理性批判の立場に關して、統覚を悟性と同一視しているが、他方両者を區別しているように思われる。即ち一方では「この能力(統覚の綜合的統一の能力)が悟性そのものである」といわれていると共に、他方では「悟性の可能性でさえ意識の統一に基づく」といわれている。悟性と統覚とは同一ではなく、悟性は先驗的統覚の対象的論理的側面を現わすに止まるものといふべきである。統覚は単に悟性的なものではない。むしろそれは悟性的なものと感性的なものとを總括する全体的なものであると考えることができる。」(「構想力の論理 第二」岩波書店、一九四六年、第三刷、一九九三年、一三四頁。)また、つぎの二つの論考は、第二版「演繹論」において統覚の階層構造が明示されていることを指摘する。中野裕考「客観的、主観的、根源的 カテゴリーの二つの特徴づけについて」(「日本カント研究」一、カントと幸福論 理想社、日本カント協会編、二〇一〇年。)中島義道「カントの時間構成の理論 理想社、一九八七年、一三二―一三三頁。

(本学文学部・非常勤講師)

